

届けたいのは「特別なひとつ」より「日常のたくさん」。

土から生まれる命

茶わん家 阿部春弥 長野県上田市

毎日の生活に溶けこむうつわを作り続けたい。
ここをこめてひねりだす白磁の世界。



「お昼まだだったらおいしい蕎麦があるんですけど、そこでもいいですか」

東京駅から一時間二〇分、新幹線はようやく上田駅に到着した。改札口で阿部春弥さんと落ち合い、あいさつを交わす。その日は朝から別件の取材が入り、待ち合わせの時刻に一時間も遅れてしまった。どんな顔をして謝ろうかと心配していたのだが、蕎麦に救われるとは思わなかった。

「じゃあ、いきましょうか。ぼくの家は山のほうなんで、寒いですよ」

磁器との出会いから

長野県上田市は平成一八年に旧上田市、丸子町、真田町、武石村が合併してできた、人口一六万人ほどの町である。古くは奈良時代から京都と東北地方を結ぶ東山道の要衝として栄え、戦国時代には真田幸村などが活躍した地としても知られている。「ここです。おいしいと思うんですけど」と言いながら店の引き戸をカラカラと開けて中へ入る。店の玄関には真田氏の家紋である六文銭が

備えてつてある。土曜日の午後で私たちのほかに客はほとんどいない。蕎麦を待つ間、阿部さんの磁器づくりにかける想いをたずねた。

「いや、ぼくは自分のペースで、自分が作りたいものを作ってるだけです。ほんとに。父が窯業をやっているの、小さいときから磁器は身の回りにありましたが、あまり興味はなかったですね。一番上の兄が父の後を継ぐんだらうなと、漠然と思っていました。父からもこの仕事についてあれこれ言われたことはなし、自分では調理師になりたいと

思っていたくらいです。ところがある日突然、兄が窯業をやめてしまった。これはもしかすると、自分

しかないのかなと。それで、どうしようかと考えた結果、愛知の瀬戸に職業訓練専門学校があつて、それに目をつけたんです。伝統工芸の継承者を育てるといふ目的があるので、授業料が無料っていうのも魅力でした。ここで月曜日から金曜日の朝九時から夕方五時までみっちり勉強しました。一年間で実技はもちろん、化学なんかも勉強するんですよ。専門校で学ぶのは基本の基本で、ここ



で教わったことをベースにして、いかに自分の色を出しているかが大切な点だと思います」

弟子入り、そこで得たもの

専門学校で一年間の技術訓練を受けたあと、学生たちはそれぞれの進路を見つけて卒業していく。阿部さんは先生の紹介で備前焼の陶芸家山本出^{やまもと}に弟子入りすることになった。

「山本先生がどんな人なのか、ぼくは全然知らなかった。学校の先生は『きみは素直でマイペースだから、まあ大丈夫だろう』っていうだけで詳しいことは何も教えてくれないんです。ぼくも、まあなんとかなるだろうくらいに考えていましたから、山本先生のところにお世話になることを決めました。山本先生のアトリエは岡山県ですから、住民票を移すために地元の役場に行ったら、役場の係の人が『あら、大変だと思っただけ、一生懸命やれば必ず力になるから、がんばりなさい』って。地元では厳しいことで有名だったんです。実際、住み込みで弟子入りしてからは、毎日が人生勉強でしたね」

阿部さんが師事することになった山本出の父は「ろくろの陶秀」といわれた備前焼の人間国宝、山本陶秀である。一対一の師弟関係は、まさに修行だった。毎日の食事、洗濯、掃除から、あらゆる日常生活の細々

の部屋。ストーブに火が入っているソファに寝をべつている。恰幅のいいネコがちりりとこちらを見て、また目を閉じた。

「ぼくは陶芸家って呼ばれるよりも、茶わん家って呼ばれたいんです。朝、昼、夕の食事にいつも出てくる食器とか、湯呑みとか、毎日の生活に溶けこむようなうつわを作りたい。いつも、なにげなく、そこにあるものを作る人になりたい。陶芸家という、世界にひとつしかない芸術品を作り出すイメージです。でも、それも楽しいと思います。でも、毎日使うような茶わんでも、それを買った人にとって、そのうつわはやっぱり世界にひとつしかないものです。だから、みんなの手に届くひとつひとつを大切にしたいなと思っていました」

阿部さんは「いうつわが作りたい」という。それは使いやすくて、手に取ったときの手触りがいいものという意味だ。そのためにいまは基本的な技術をきちんと身につけることにしている。練る、ひく、描く、焼くというひとつひとつの作業を、しっかりと土台ができるまで、ぴちつとしたものを、ぴちつと作れるまで、あせらずに自分のペースで歩んでいく。

大切なのは楽しむこと

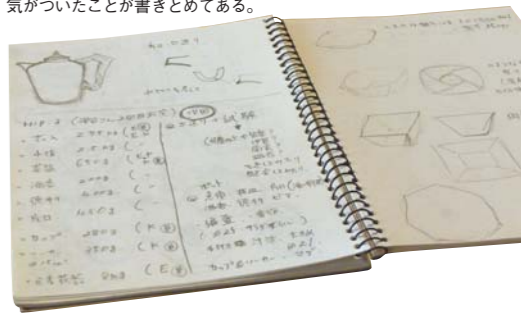
阿部さんの一日は朝八時から始まる。朝食をとって九時から作業を開始。十時ごろ休憩。少し作業を続け、昼食。午後は一時から作業を再開したら、三時のお茶。夕方になるとラジオ体操の時間。仕事柄、腰痛に悩まされているが、体操をはじめからずいぶん楽になった。午後七時ごろまで作業を続けて、夕食。夜は九時から十一時まで最後の作業に取りかかり、十二時に就寝。ほぼ毎日このペースでのんびりと時間が流れてゆく。

「作品づくりで煮詰まることはほとんどないですね。土を触っていると、何にも考えませんから。そもそも悩まないというか……。あるとすれば絵付けのときかな。いったん止まると動かなくなる。そういうときは本を読んでリラックスすることが多いです。時代小説が好きで、藤沢周平とか池波正太郎とか、浅田次郎もいいですよ。あとはご飯を食べ、人と話して気分転換したり。悩んでいてもいいものはできないし、楽しんで作ることがいちばん大切だと思います」

「せっかくだから、やってみますか？」と、三角形の土をろくろの上のせたところから、陶芸教室開店。ろくろは手で回すものだと思っていたが、今は電動式だ。ちなみに、ろくろは「回す」ものではなく、「ひく」のだとか。お手本をお願いする



アイデアノートには次回作の構想や日々気がついたことが書きとめてある。



としたことをこなしながら、山本の作陶の下準備をしたり、窯焚き用の薪を割ったりしなければならぬ。窯焚きで夜通し起きていた次の朝、ようやく休憩できると思ったらすぐに呼び止められて、次の用事を頼まれることもあった。山本の下で過ごした三年間で自分の作品はゼロ。ただのひたすら作れないくらい忙しかった。それでも、山本の陶芸に対する独特な視点やオリジナリティを追求する姿勢、作陶の大きな流れを見ることができたことは阿部さんにとって貴重な経験だった。

ひとつひとつを大切に作る茶わん家でありたい

阿部さんの住居兼アトリエは風合いのある古民家。玄関にあがると木のいい香りが広がっている。磨りガラスの窓から午後の光がやわらかく差し込んでくる。先に連絡をしておいたのか、奥様の美香さんが迎えてくださった。通されたのは居間兼ダイニング兼作業場という八畳ほど



愛用の電気釜。使いこなすのに苦労した。



ろくろひき。すべての動きが静かに流れてゆく。



作業場。正面の窓からうすい木もれ日が入り込んでくる。





あべ・はるや／1982年、長野県真田町生まれ。2001年、愛知県立窯業高等技術専門学校を終了。備前陶芸家山本出に師事した後、2004年から長野県上田市で作陶を始める。

【阿部春弥作品取扱店】

暮らしのうつわ 花田／03-3262-0669 千代田区九段南2-2-5九段ビル1・2F
 田園調布 いちょう／03-3721-3010 大田区田園調布3-1-1ガデス田園調布ビル2F
 陶芸サロンやまもと／03-3794-2202 目黒区鷹番3-3-19

と、さつきまでのやわらかい表情から、静かな揺るぎない表情へと顔つきが変わった。
 ろくろが静かに回る。阿部さんはしゃべらない。美香さんもしゃべらない。ぼてつとした三角形から上へ上へとなめらかなかたちが現れる。飯茶わんのかたちを与えられた土の高台を、糸でブツと切り離し、脇の板にそつとのせる。もうひとつ、まったく同じかたちのものを作って、ブツと切り、そつとのせる。磁器は静謐から生まれてくるのだ。磁器を手に取るとき、じっと黙るのは、磁器が生まれる瞬間を見届けるためなのかもしれない。

失敗、失敗、成功

「このあと三日くらい乾かしてから、絵付けをします」といいながら、阿部さんは隣の部屋から乾いた飯茶わんを持ってきて、料理番組のように次の工程を紹介してくれる。からりと乾いた茶わんは赤みがかったピンク色。ほほを染めたようなやわらかい色だ。絵の具のパレットを取り出し、染料を水で溶き、絵筆を持ってろくろをひいているときはまた違う表情をする。
 「自分ひとりで営業に行くんですよ、東京まで。作品をキャリアケースに詰めて、新幹線に乗って。九段下とか田園調布とか、銀座とか、地



ろくろから切り離されたばかりのうつわ。力の入れ方ひとつでさまざまなかたちが生まれる。

図を見ながら大きなケースをもってうろうろ歩いて、あやしいですよ。朝、家を出るときに、よし、今日は絶対いける、と思って勢いよく出てくるんです。ところが、新幹線が東京に近づくとつれてさつきまでの自信が揺らいでくる。やつぱりそんな

の前に並べると、たいていの場合、お店の人が作品をじろつとながめて『はい、ありがとうございます』で終わり。でも、そんなことを繰り返していくうちに、いま東京では三軒のお店に作品を置かせてもらっています。『暮らしのうつわ 花田』

によくないかもしれない、自分ではいいと思っただけ、お店の人にとってはたいしたことないのかもしれない、って。目当てのお店の前に立つて、扉を開けるときがいちばん緊張しますね。それからあつという間ですよ。持ってきた作品をお店の人

の社長さんはじっくりと作品を見てくださって、ためになるコメントをつけてくれるんです。『絵付けの線は、一本一本、表情をつけて』『あなたの心を作品に込めるように』『もう少し勉強してから、また持ってきて下さい。いつでも見てあげるか

ら』と。ぼくは思いついたことや気がついたことをノートにまとめているのですが、花田さんに寄ったときのメモはいつもよりびっしり書き込んでありますよ。それを読み返して、失いかけた自信をどうにか取り戻すんです。よし、今日勉強させてもらったことを活かして、今度はもっといいものを持ってくるぞ、と」
 ひとりで作陶を始めてから、いくつもの失敗を重ねてきた。一〇〇万円をつぎ込んで新調した電気窯がうまく焚けず、納品日ぎりぎりまで窯と格闘して、最後は祈るしかなかったこともある。それでも阿部さんは歩みをとめようと思ったことは一度もない。

「陶芸は五十歳を過ぎてようやく一人前という世界。ぼくなんかまだ生まれてもないかな。まだまだ修行中です。これからどういう職人になっていくのか、想像ができないけど、自分らしく、マイペースでやっていけたらいいですね」

話に集中していたらすっかり日がかたむき、冷え込んできた。美香さんの言葉に甘えて、夕飯をごちそうになる。ついさつきまで土をこねていた作業台は食卓へと早変わりする。仕事と生活がひとつになっている暮らし。そこにはものづくりのたしかかな手応えがある。
 外に出ると上田の町に雪が降り始めていた。

